

「頭を冷してくれませんか」

久子は足許の方を氣を付けて、毛布をヒツパツたり、小さな掛け布團を運んだり、それから手拭ひを濡らして来て、僕の額の上へ載せてくれたりした。

二分間置位に春子も来て手拭ひを替えてくれる。

「春子さん〜」僕は春子と呼ぶのだつた。

臺所の方で手拭ひを水に絞つて、次の室まで春子が持つて来て、夫を久子が僕の額の上へ載せる。

十八の女の親切には、ヒノエウマのオド〜しさが無い。

春子は唐紙の蔭から、心配そうに覗いたりしてはヒツコム。

氣分が幾何かづゝ沈まつてくると共に、僕は明らかな決定をしなければならないと思つた。

目的を屢々變更する事は悪だ。

強羅の温泉宿で、馬力を掛けて書いた繪葉書のラブレターを、久子に渡したのは失敗だつた。

僕の精神は偉大な電波の力で、既に春子に電達し終えられてゐるのだ。